

2016年8月12、13日 南アルプス大武川本流

メンバー；L朝倉、倉澤、久保

夏の南アルプス沢登りの第一弾として大武川本流をつめ仙水峠を越えて北沢峠に至る沢遊びを楽しんだ。

一日目 篠沢橋のゲートより約1時間の林道歩きで入渓点に到着。事前入手の情報では上の林道より入渓点まで草つきを下降するはずであったが、本流沿いに林道が伸びておりその終点が入渓点となっていた。

入渓してすぐに左から赤薙沢が流れ込んでくる。赤薙ノ滝を木の間越しに見て本流を進む。深い緑色の淵と花崗岩の滝がいくつも現れる。巻きの踏み跡もあり沢やや釣り師が入っていることが伺える。砂地に新しい足跡が残っていたりする。花崗岩と緑の淵が作り出すコントラストを楽しみながら小滝を巻き上げていくと手前の沢と間違えたカラ沢が左岸より合流してくる。炭のにおいがする、と言うのでキョロキョロすると焚き火の跡があり溪流魚を食べた後の串が数本やけに整然と薪に立てかけられてあった。この頃には走る魚影はアマゴであろうとほぼ確信していた。

この先もまだまだ滝と淵が沢山現れてくるが直登できた滝はなし。途中緩やかに釜の連続するナメを見ながら昼食としたりしながら前栗沢の出合着。ここに良好な草地のテント場が広がっていたが予定通り中栗沢まで足を伸ばす。まさにその沢の落ち口正面に期待していた泊まり場はあった。時間は早いがここにタープを張り素麺と朝取りの枝豆を味わう。

焚き火と夕食の準備は二人に任せもう一つの目的の魚釣りに出かける。テンバの脇ですぐに一匹釣上げる。25センチ程で、やはりアマゴであった。楽勝気分で一匹目なので敬意を表しリリース。しかしその後全く釣れない。水量1：1の赤石沢もだめ。魚影はあるしフライに反応し出てくるのだが引き返していってしまう。上流をあきらめテンバに戻りフライサイズを下げて下流で再チャレンジ。ようやく25センチのオスとそれよりやや小さめのメスをキープすることができた。

夕食は久保さん作のおいなり、肉豆腐、ポテトサラダ、朝取り茄子の焚き火焼きなどに舌つつみを打つ。アマゴは焼き枯らして翌朝。

二日目 中栗沢の出合の泊り場を出てすぐに右に赤石沢を見送ると本流の水量は半減する。斜度を増し始めた大岩の累積する河原を行くと左からの奥栗沢を分けやがて左岸に摩利支天前沢が流れ落ちてくる。本日の核心であろうところの六町ノ滝の巻きに備え休息と腹ごしらえをする。

六町ノ滝の巻きはまず摩利支天前沢に入り最初に出会う水量のある右岸の沢に入り登れるあたりまで行く。やがて沢が登りにくくなると左に隣接する尾根の踏み跡をたどるがアザミとバラの棘に悩まされる。そのうち踏み跡を見失ったためロープを出し頭上の急斜面を張り出した木や枝を頼りにまた一方ではそれらに邪魔されながら悪戦苦闘の2ピッチ

でようやく明瞭な踏み跡が現れホッとした。そのまま踏み跡に沿って直上し、トラバースしていくと沢幅が狭くなった本流に再会した。そこは樹林の中の平らな草地を持った好テン場であった。

だいぶスケールの小さくなった本流を再び遡行。右から摩利支天沢を会わせ更にいくと前方にガレ場が現れそれを避け本流は右に方向を変え沢も水晶沢と名を変え駒本峰直下に消えていくはずであるが我々の遡行はここまでである。大休止を取り沢靴を下山用の靴に履き替える。

さて、本日のもう一つの気掛りはこちらからの急傾斜の仙水峠へのルートファインディングであったが樹林の中の獣道を本能の赴くままに拾っていくと30分強であっけなく峠の道標に飛び出した。この後北沢峠に降り臨時のバスで芦安に向け帰途に着いた。

天候；12日 曇りがちだがおおむね晴れ 夜少々降雨

13日 稜線に雲掛かることはあったが晴れ 摩利支天は見えた

コースタイム；

12日 5：30自宅発～6：20篠沢橋ゲート～7：30入渓点～10：00カラ沢出合～13：20中栗沢出合（泊）

13日 6：00テンバ発～7：15摩利支天前沢出合～9：50南山稜を越え本流に戻る～10：30水晶沢始り11：00～11：35仙水峠